

漢語近世音と契丹文字漢字音(14)

—止摂荘・章組破擦音、契丹漢字音の有無—

吉池孝一 中村雅之

残された問題

吉池：前回は止摂荘・章組摩擦音に ㄱ と ㄱ が同時に現われる事実を、どの様に説明するかという問題について、劉浦江・康鵬(2014)¹の語彙索引と、主に劉鳳翥(2014)²所収の契丹文の全資料の模写と傍訳を利用し検討しました。

中村：止摂“荘組”摩擦音では、主に拗音性が消失した ㄱ ・ ㄱ で表記され、拗音性が有る ㄱ も併用されるわけですが、その理由は二つありました。一つは、「度使」(ㄱ or ㄱ ㄱ) が旧音を保持した語彙として読まれたため。いま一つは「敝史・太師・宮使・軍師・上師居士・上師」の「史」「師」「使」が ㄱ でも表記されたのは、「史」「師」「使」の ㄱ が、燕雲地方一帯の漢語を解する契丹人などによって、契丹語音の ㄱ と誤認されたためとしました。

どういふわけか止摂“章組”摩擦音では、 ㄱ が使用される例は認められないのですが、それは①使用される章組の摩擦音字が少ないことと、②章組の摩擦音字の中で多数を占める語が「侍中」であり「侍」が語頭に位置することにより ㄱ とする誤読が起りにくかったことによる。この二つが重なって偶然に例数が0となっているに過ぎないと思いました。当時の漢語音では、止摂の荘組摩擦音においても章組摩擦音においても、拗音性は消失していたとして矛盾は無いとしたわけですね。

吉池：止摂荘・章組の摩擦音についてはそれなりの説明を付すことができたのですが、問題は、止摂荘・章組の破擦音です。

中村：読解が成されている止摂荘・章組の破擦音の例が少ないため、摩擦音のみを扱いましたが、今回は、破裂音の状況も確認し、それから最後に「度使」(ㄱ or ㄱ ㄱ) のような旧音を保持した語彙をどの様に考えるか、何らかの漢語音が反映したものか、或は“契丹漢字音”のようなものとしてよいかということについて検討しようということでした。

¹ 劉浦江・康鵬(2014)『契丹小字詞彙索引』北京：中華書局。

² 劉鳳翥(2014)『契丹文字研究類編』(第一冊～第四冊)北京：中華書局。

吉池：止摂荘・章組の破擦音の状況については、劉浦江・康鵬(2014)³の語彙索引と劉鳳翥(2014)を利用して確認しましょう。

止摂荘・章組の破擦音

吉池：『契丹小字研究』(1985)や吉池孝一(2004a,b)⁴によると、止摂荘・章組においては、「支、之、脂、紙、旨」などの破擦音は極めて少なく、ほとんどが「使、師、史、侍」などの摩擦音の字です。そこで、新出資料を加えた劉浦江・康鵬(2014)の語彙索引と劉鳳翥(2014)によって、止摂荘・章組の破擦音を確認してみました。

なお、劉浦江・康鵬(2014)の語彙索引は、例えば、「𠵹 先 22-1 宗 35-23 奴 45-29 梁 8-5 韓 6-16 参考詞義：只」(179 頁)のように、「契丹小字の語彙—語彙の出所—参考詞義」の順に並べます。そこで劉鳳翥(2014)によって、それぞれの契丹小字語彙の傍訳を確認すると、韓(蕭特每夫人韓氏墓誌)の 6-16(第 6 行 16 字目)の𠵹を、𠵹(只)-𠵹𠵹(哥)として人名「只哥」と読みます。「只」は止摂歯音の章母で該当する字です。宗 35-23 は「治」(止摂舌音の澄母)と読み、先 22-1 奴 45-29 梁 8-5 には傍訳がありません。そこで、止摂章母の「只」のみを該当する読みとします。これらについては、次のように整理して提示することにします。「𠵹」以外の例(𠵹と𠵹)についても続けて提示します。

■ 𠵹

蕭特每夫人韓氏墓誌(1078)

・「𠵹 6-16 只哥(人名)」。劉鳳翥(2014:748)の模写と傍訳は左のようにするが、即實(2012:210)は𠵹(札)-𠵹𠵹(哥)として人名「札哥」と読む。いずれの漢字表記も根拠はない。

■ 𠵹

耶律奴墓誌(1099)

・「𠵹𠵹 27-25 成治(人名)於」。劉鳳翥(2014:181)⁵は、𠵹𠵹(成)𠵹(治)𠵹(於。格語尾〜に)とし、𠵹𠵹𠵹(成治)を人名とするが、漢字表記に根拠はない。即實(2012:58)は𠵹𠵹(承)𠵹(旨)とし、𠵹𠵹𠵹(承旨)を官職名とする。「治」は止摂舌音澄母、「旨」は止摂歯音章母である。

³ 劉浦江・康鵬(2014)『契丹小字詞彙索引』北京：中華書局。

⁴ 吉池孝一(2004a)「止攝開口精母系の漢語音を表わす契丹小字について」『KOTONOHA』14、11-14 頁。吉池孝一(2004b)「止攝開口莊章母系の漢語音を表わす契丹小字について」『KOTONOHA』15、11-14 頁。これらは吉池孝一・中村雅之・長田礼子(2020)『契丹語と契丹文字 付碑文拓本 9 種画像 (JPEG)』愛知：古代文字資料館、89-92、93-96 頁所収。

⁵ 劉鳳翥(2014)「契丹小字《耶律奴墓誌銘》再考釋」『契丹文字研究類編』(第一冊～第四冊)北京：中華書局、177-182 頁。「只」は宋代の韻書『古今韻會舉要』には「紙」と同音の上声字と「質」と同音の入声字があり、『蒙古字韻』は上声字とし、『中原音韻』は入声字(入声作上声)とする。

耶律副署墓誌 (1102)

・「**ㄨ** 25-2 承旨 (官職名)」。劉浦江・康鵬(2014)は参考詞義を「職／知、詞尾表靜詞類附加成分」(111 頁)とし「旨」を挙げないが、劉鳳翥(2014:910)所収の模写は**ㄨ** (承) **ㄨ** (旨) とし、**ㄨ** (承旨) を官職名とする⁶。即實(2012:303)も**ㄨ** (承旨) とする。

■ **ㄨ**

耶律迪烈墓誌 (1092)

・「**ㄨ** 17-12 承旨 (官職名)」。**ㄨ** (承) **ㄨ** (旨) とする。

耶律副署墓誌 (1102)

・「**ㄨ** 15-29 承旨 (官職名)」「**ㄨ** 16-3 承旨 (官職名)」。両者共に**ㄨ** (承) **ㄨ** (旨) とする。

尚食局使蕭公墓誌【蕭居士墓誌】(1175)

・「**ㄨ** 12-4 指揮使 (官職名)」。**ㄨ** (指) **ㄨ** (揮) **ㄨ** (使) とする。「指」は止撰齒音章母。

・**ㄨ** 6-33 で「淄」(地名)を表記する例があることについては第 11 回の議論で確認した⁷。「淄」は止撰齒音莊母。もともと劉浦江・康鵬(2014)は、これを「**ㄨ** 6-33 参考詞義無し」とする。

資料	声母	ㄨ	ㄨ ㄨ i	引	ㄨ
遼代					
蕭特每夫人韓氏墓誌 (1078)	章組			? <u>只哥</u> or <u>札哥</u> 1(人名)	
耶律迪烈墓誌 (1092)	章組	承旨 1			
耶律奴墓誌 (1099)	章組				成治 (人名) or 承旨 1
耶律副署墓誌 (1102)	章組	承旨 2			承旨 1
尚食局使蕭公墓誌【蕭居士墓誌】(1175)	莊組		淄 (地名) 1		
	章組	指揮使 1			

(図表 1)

⁶ 蓋之庸・齊曉光・劉鳳翥(2008)「契丹小字《耶律副部署墓誌銘》考釋」『內蒙古文物考古』2008 年第 1 期。劉鳳翥(2014)『契丹文字研究類編』(第一冊～第四冊)北京：中華書局、205-216 頁所収によると、**ㄨ** (承) **ㄨ** (旨) と誤まる。拓本によると**ㄨ**ではなく**ㄨ**である。

⁷ 吉池孝一・中村雅之(2021)「漢語近世音と契丹文字漢字音 (11)—前回の補足：ㄨ (ㄨ) の用例五種の検討—」『KOTONOHA』第 221 号 (2021 年 4 月)、33-40 頁参照。

中村：ㄗとㄌとㄍとㄍㄨの間、何か用法上の違いはありますか。

吉池：ㄗ・ㄌとㄍ・ㄍㄨとでは違いがあります。ㄗ・ㄌで表記される漢字は『中原音韻』の齊微韻の字「知」「治」「職」が主体のようです⁸。またㄗとㄌは漢字音以外にも使われています⁹。他方ㄍとㄍㄨは漢字音の表記のみに使用され、しかも『中原音韻』の支思韻の字「旨」「指」のみです。

中村：ㄍ・ㄍㄨの用例が、止摂章組の破擦音「旨」「指」の表記に限られるとなると、漢語音を表記する専用字と見ることができます。そうであるならば、その音は契丹語に無い音であり、拗音性が消失した tʃi のような音と見るのが穏当なところでしょう。

他方のㄗ・ㄌは問題ですね。止摂の破擦音をㄗで表記する上記の例は、根拠が薄いので措くとして、ㄌの方は検討の必要がありそうです。ㄌによって、『中原音韻』の齊微韻の字「知」「治」「職」を主に表記するとなると、tʃi のような音を想定するのが穏当なところでしょう。もっとも、同時にㄌ用ㄌ（承旨）のように、『中原音韻』で支思韻となる止摂章組の破擦音字「旨」をも表記するとなると厄介です。

吉池：耶律副署墓誌（1102）では、ㄍ「承旨₂」とㄌ「承旨₁」が混在しているわけですが、これをどのように考えるか、さまざまな想定が可能ですが、例数が少なく、確かなことは言えそうもありません。

中村：今後の課題ということにせざるを得ないでしょう。それでは、最後に漢語借用語音の諸層について検討しておきましょう。

漢語借用語音の諸層の検討

⁸ ㄗは、「治」と訳される例が耶律宗教墓誌（1053）35-23に1例ある。劉鳳翥(2010)は、**𐰺**（察）-**𐰺**（治）とし「察治」（人名）とするが、即實(2012:10)は「查只」とする。いずれも漢字表記に根拠はない。劉鳳翥(2010)「契丹小字《耶律宗教墓誌銘》考釋」『文史』2010年第4輯。劉鳳翥(2014)、70-79所収による。ㄌは、「同知」（先 14-8,21-20,22-57,迪 16-14,18-33,23-34,圖 9-20,紉 8-22）、「知院」（涿 15-9）、「職方」（郎 5-25）などがある。

⁹ 劉浦江・康鵬(2014)の語彙索引によると**𐰺**には、**𐰺**が語頭にある例として契丹語の「陽」の意味を表わす**𐰺坐火**（郎 2-2）がある。語頭以外に**𐰺**がある例として意味は不明であるが**𐰺𐰺𐰺𐰺𐰺**（紉 28-16）などがある。ㄌには、ㄌが語頭にある例として意味は不明であるが**ㄌ𐰺𐰺𐰺**（許 37-25,副 17-25,福 25-5）などがある。語頭以外にㄌがある例としては**ㄌ𐰺𐰺**（宣 9-11、故 6-26,博 12-35,尚 6-10）などがある。4例の**ㄌ𐰺𐰺**のうち、劉鳳翥(2014)は、故 6-26と博 12-35の2例に「馬」という旁訳を付す。仮に**ㄌ𐰺𐰺**が契丹語の「馬」であるとして、それに付された**ㄌ**が何を指すか問題である。あるいは複数語尾**𐰺 dʒi**と関係があるのかもしれない。

吉池：我々は先ず入声韻尾の消失について議論しました。なお、漢語入声韻尾に相当する契丹語音の表記ですが、漢語音と契丹語音との混同を避けるための便宜的な措置として b,d,g で記することにしました¹⁰。結果は次のとおりです。

	旧漢語 k 韻尾	旧漢語 t 韻尾	旧漢語 p 韻尾
借用語 A 層	無	無	b ¹⁾
借用語 B 層	g ²⁾	r ³⁾	
借用語 C 層		l ⁴⁾	

- 1) 漢人名の業の大字𠬞𠬞𠬞 (ŋ-b)。漢数字の十の大字 𠬞、小字 𠬞𠬞と 𠬞𠬞 (jib)。臘月の臘の小字 𠬞𠬞𠬞 (lab)。
 2) 崇祿大夫の祿 𠬞𠬞 (lug)。僕射の僕 𠬞𠬞 (bug)。博州の博 𠬞𠬞 (bog)。度使の度 𠬞𠬞と 𠬞𠬞 (d-g)。易經の易 𠬞𠬞 (ig)。積慶宮の積 𠬞𠬞 (sig)。
 3) 樞密の密 𠬞𠬞 (mir/ mər)。
 4) 筆 𠬞𠬞 (bil)。

〈図表 2〉

入声韻尾の大勢である A 層では、旧漢語 k 韻尾と旧漢語 t 韻尾に相当する韻尾がなく、旧漢語 p 韻尾に相当する b があります。これは北宋漢人の洛陽音を反映していると想定される『皇極經世聲音唱和圖』（作製年代は 1011-1077 年）の入声韻尾の状況（-k と -t は消失しており、-p のみ認められる）と同じです。

中村：唐代後半以降に北方では広範囲に言語接触が起こり、その結果 -t 韻尾や -k 韻尾が消失した。それが北宋の『皇極經世聲音唱和圖』にも、遼の契丹小字資料にも反映しているということでしょう。その際に、契丹の知識人は、語彙によっては古い発音をも取り込んでいて、それが B 層や C 層です。この古い発音の層をどのように理解するか、ということが問題となります。

吉池：B 層の旧漢語 k 韻尾にあたる崇祿大夫の祿、僕射の僕、博州の博、度使の度、易經の

¹⁰ 契丹語の破裂音・破擦音の表記法としては、b,d,g,dʒ と p,t,k,tʃ とするか、p,t,k,tʃ と p^h,t^h,k^h,tʃ^h とするか、場合によっては b,d,g,dʒ と p^h,t^h,k^h,tʃ^h とするかの場合がある。

契丹語の破裂音と破擦音がどのような音によって対立していたかという点について、三つの立場がある。[t] を例とすると、
 ①強音と弱音の対立とする立場。強音は発音器官の緊張。音声としては主に [t^h] など。弱音は発音器官の弛緩。音声としては [t~d~d] など。
 ②清濁の対立とする立場。清音（無声音）[t] と濁音（有声音）[d]。
 ③気音の有無による対立とする立場。無声有気 [t^h] と無声無気 [t]。無気音は、気音さえ無ければ良いので、前後の環境により [t]（無声）～ [d̥]（半有聲）～ [d]（有聲）という揺れ幅がある。

易、積慶宮の積などの g は、特定の単語に旧音が保存されていると見ることができます。旧漢語 t 韻尾に相当する r 韻尾も、特定の単語に見られます。そうであるならば、少なくとも B 層については“契丹漢字音”¹¹と見て大過は無いとおもうのですがいかがでしょう。

中村：B 層を“契丹漢字音”と見ることに就いては、止摂摩擦音の状況も支持します。止摂摩擦音は、主に拗音性が消失した **ㄹ・ㄹ*** *ɕi* で表記されます。このことより、契丹文中の漢語借用語では拗音性が消失し元代の『中原音韻』のような状況であったとみるのが穏当なところでしょう。ところが、「度使」という特定の単語において、「使」は拗音性のある **ㄹ*** *ɕi* で表記されます。「使」の **ㄹ*** *ɕi* は旧音を保持した音と見ていいのでしょうか。同時に「度使」の「度」は〈図表 2〉の B 層と同様の音節です。旧漢語 k 韻尾に相当する g を持っており、**ㄷ** 又は **ㄷ*** (*d-g*) で表記されます。旧音を保持した B 層の入声相当の音と、旧音を保持した止摂摩擦音 **ㄹ*** *ɕi* とが、「度使」という特定の単語に於いて共存しているわけです。この「度使」は、唐代より使用されている「節度使」の略称とされるので、この単語が早い時期に契丹に借用され旧音が保持されているというのは自然なことです。もっとも、「度使」と「節度使」の両表記があり、後者の場合、旧音は保持されません。なぜこのようなことが起こるのか検討すべき課題ですが。

吉池：C 層をどのように見るか、難しいですね。

中村：C 層は一例のみであり、これを層と言うことが適当であるかということですね。仮に層として議論するならば、B 層よりも古い“契丹漢字音”か、あるいは旧音を保持した“契丹漢字音”ではなく、契丹国を支えるモンゴル系、ウイグル系、チベット系の諸民族が持っていた漢字音が顔を出した、という可能性もあります。これも今後の課題とするしかありません。

吉池：契丹文中の漢語借用語の層についてまとめると次のようになりそうです。

契丹文中の漢語借用語の音には幾つかの層がある。旧入声韻尾の **-k, -t** に相当する音が無く **-p** に相当する **-b** がある A 層や、止摂歯音の拗音性が消失した層は、最も新しい漢語音を反映するものである。旧入声韻尾の **-k, -t** に相当する **-g, -r** がある B 層や、止摂歯音の摩擦音において拗音性を保持した層は、旧音を反映する契丹漢字音である。旧入声韻尾の **-t** に相当する **-l** を持つ音を仮に C 層としたが、これがどのような性質の音であるか、今後の課題である。

¹¹ ここで言う“契丹漢字音”は、過去に借用された漢語音が特定の語彙とともに漢字音として使用され続け、新たに取り入れた漢語音とは異なる音となっているものを指す。日本漢字音やベトナム漢字音と同質と見なすことができるもの。

中村：そんなところでしょうね。入声韻尾の状況と止摂歯音の状況から、契丹文字の漢字音に少なくとも二つの階層があることが確認できました。細部にはなお検討を要する事項もありますが、さらなる資料の開拓と解読の発展によって、より詳しい状況が明らかになるのではないかと思います。

吉池：それでは、14 回に渡って入声韻尾の有無と止摂歯音の拗音性の有無について議論してきましたが、このあたりで終了ということにしましょう。